

第6節 伝経ヶ岳出土資料について

篠原 武（富士吉田市教育委員会）

1 はじめに

富士山の吉田口登山道（山梨県富士吉田市）五合五勺に位置する経ヶ岳で大正 13 年（1924）に発見された経筒と経巻が、初めて世に知られたのは、昭和 10 年（1935）7 月 3 日付けの山梨日日新聞の記事（参考資料 1）による。記事を見ると、大正 13 年の 6 月中に経ヶ岳で行われた工事の際に経筒と法華経 10 巻が出土したことや、その 9 年後となる昭和 10 年になって専門家へ鑑定を依頼した経緯とともに、当時これらの出土品が、日蓮上人が写経し埋納したものとの認識があったことが分かる。また、鑑定人の中に、経塚研究の第一人者である石田茂作氏の名がみえるように、経塚出土資料との認識も一方であったことが分かる。その後、これらの資料は、塩谷家により代々大切に守り伝えられ、富士信仰研究者により、その概略が紹介される¹こともあったが、平成 14 年（2002）に開催された富士吉田市歴史民俗博物館企画展「富士の信仰遺跡」及び企画展図録『富士の信仰遺跡』²で、展示公開及び報告されるまで、考古学も含め各分野で学術的評価が行われることはなかった。

資料自体は第一級資料と評価されながら、60 年以上にわたって雌伏の時を過ごさざる得なかったその遠因には、発見時に現地の学術調査がなされなかったことや、その発見から報告までに 9 年の空白期間があったことにより、これらの資料が、確かに経ヶ岳出土であるという客観的証拠が残されなかったことがある。そのため、後になると経ヶ岳ではなく富士山頂から出土したものであるという指摘もなされる³というように、その評価は未だに定まっていなかったため、本論中では「伝経ヶ岳出土資料」と呼称したい。

このような現状を踏まえ、今回の報告では、未図化であった伝経ヶ岳出土資料の図化を行い、基礎データを提示し今後の評価に備えると共に、経ヶ岳の歴史を文献資料等を用いて紐解きつつ、未解決となっている伝経ヶ岳出土資料の出土地の問題を中心にその課題を提示したい。

2 伝経ヶ岳出土資料について

(1) 経ヶ岳と伝経ヶ岳出土資料の出土地点（図 1）

詳しくは後述するが、富士山中にはいくつか経ヶ岳と称する場所がある。今回紹介する資料が出土したとされる吉田口の経ヶ岳は、富士山北面の枝尾根先端で標高 2,306m を測る小ピーク（以下、経ヶ岳山頂）を中心とした地のことで、剥き出しの岩が聳えていることから江戸時代には「岩嶺」⁴と称されている⁵。吉田口登山道はその経ヶ岳山頂に南進しながら近づき、その手前で迂回のため南西へ折れ、途中で U 字状に折返して北東へ進みながら経ヶ岳山頂の北側を回り込こんで、また南西へ登り上げていく。この内の北東へ向かう登山道の南西側に、小屋と昭和 28 年（1953）に建築された八角堂（常唱殿）⁶があり、現在ではここが経ヶ岳の中心地と認識されている。周辺は樹林のため眺望を遮られているが、枝尾根の先端部のため、樹高が低ければ、富士山麓を一望することも可能な地であろう。また、南を望めば、富士山頂が眼上に聳えており、山中の景勝地といえる。なお、現在の登山道のうち、馬返～五合目は、明治 40 年の登山道改良工事⁷により一部付け替えられているが、五合五勺の経ヶ岳周辺についても、江戸時代後期の富士山中の記録である『富士山明細図』⁸や『富士山真景之図』⁹に描かれる経ヶ岳の様子とは大きく異なっている。これらの絵図中には、経ヶ岳山頂ではなく、登山道を挟んで北に位置する姥ヶ懐という岩穴へと直登するように登山道が描かれており、やはり五合目から経ヶ岳までの登山道も、近代になって付け替えられたものと考えられる¹⁰。そのため、小屋と八角堂がある地も、過去の登山道から離れていることになるが、遠藤秀男氏によると「経ヶ岳のお堂背後に開かれた小道をすこし行ったところ、けずりとられた崖面にポツリと古銭が顔をのぞかせていた」とし、宋銭・明銭を合計 15 枚発見した¹¹とあるため、近代以後の歴史しかないと言はできない。

なお、この現在の経ヶ岳と姥ヶ懐については、近世の記録との差異が他に 2 点ある。まず、『甲斐国志』¹²及び『甲斐国志草稿』¹³によれば、経ヶ岳の南（上）に姥ヶ懐があったとされ、現在の位置関係と南北が逆転している。次に、『富士山明細図』及び『富士山真景之図』によれば、現在では、別々の地と認識している経ヶ岳と姥ヶ懐を、同一地と認識しているようにみえる。具体的には、まず『富士山明細図』の「経ヶ嶽日蓮上人百日行場」¹⁴と題す



図1 経ヶ岳周辺図

参考資料1

埋蔵の経筒から国宝的日蓮手写の経文十巻
昭和十年七月三日

埋蔵の経筒から国宝的日蓮手写の経文十巻 鷲尾博士等が真物の折紙

南都留郡福地村上吉田塩谷平内左衛門氏は、大正十三年六月中富士山経ヶ嶽日蓮上人の遺跡の仮宮増築工事の際、青銅製の経筒を発掘、所蔵していたが、日蓮主義を鼓吹して日本精神を明徴にしやうと経ヶ嶽奉讃会を組織し昨年参籠所を建築したが、六月二十五日所蔵の経筒を携帯して上京し、徳富蘇峰翁に鑑定を請うたところ、翁は史料編纂官文学博士鷲尾順敬、渡邊□祐、岩橋小弥太、帝国博物館溝口慎次郎、石田茂作氏等を紹介、史料編纂所で展覧、権威の五氏が鑑定の結果、経筒は鎌倉時代のもので中に蔵された十巻の経文は、法華経八巻、開結経二巻で日蓮が文永六年相州から駿州路に入り吉田着、初代塩谷平内左衛門氏方に宿り、富士に登山、中腹の景勝地に手写の法華経を埋め一百日の行を終へて下山した史実に合致する得難き宝物である事、裏書され博物館から国宝に等しい物語寄託を切望されたが奉讃会の事業達成までは持ち帰った。この経筒は六百七十年前に埋蔵したもので、腐食し中の経文は純日本紙の事として一束となり、一巻を解くに半日もかゝつた今後真空硝子壺に保蔵する【写真は塩谷氏】

る絵図中には、お堂とそれに隣接する題目が刻まれた大岩が、『富士山明細図』の数年後を描くとされる『富士山真景之図』の「文永六年妙経一部ヲ埋テ 経ヶ嶽」¹⁵と題する絵図中には、「姥ヶ懐」とある岩穴とそれに隣接するやはり題目が刻まれた大岩が描かれている。このうち、『富士山明細図』のお堂は、『富士山真景之図』の「五合五勺小御嶽横吹一ノ鳥居」¹⁶と題する絵図中に「弘化二巳年ヨリ日蓮祖師堂経ヶ岳ヨリ引テ立ル」と記して一ノ鳥居手前に描く日蓮堂と同一建物で、経ヶ岳から一ノ鳥居前へ移築されている可能性がある。従って、『富士山明細図』中のお堂は、『富士山真景之図』に描かれる姥ヶ懐を覆うように建てられているのであり、その数年後に一ノ鳥居前に移築されたとも解釈できる。その場合、両絵図とも姥ヶ懐及び題目碑を含む地を経ヶ岳と認識していることになり、経ヶ岳と姥ヶ懐を別個のものとする現在の認識とやや差異が出てくる。ここでは、これ以上この問題に立入らないが、近世と現在の経ヶ岳と姥ヶ懐の位置や認識に大きな相違があるのは確かであり、踏査等により再検討を行う必要がある。

では、伝経ヶ岳出土資料は、これらのうちのどこで出土したとされるのであろうか。参考資料1によれば、「富士山経ヶ嶽日蓮上人の遺跡の仮宮」の増築工事中に出土したとされるが、その仮宮の位置は現在特定されていない。ただ、昭和10年時点で、「日蓮上人の遺跡」という認識があるのは、経ヶ岳山頂・経ヶ岳山頂下・姥ヶ懐の3ヶ所であり、今後、現地調査や文献調査を通じて、この場所についても特定する必要がある。

(2) 伝経ヶ岳出土資料の内訳

経筒1点、経巻9点、既に開かれた經典1点で構成される。

経筒 (図2・写真1) 全体に緑青を吹くとともに、体部外面については、制作時か後の劣化により生じたとみられる直径1mm以下の気泡状の空隙が全面にあるが、底部には、そうした空隙は一切みられず、平滑な面となっている。上部は部分的に欠けているが、上端部は1/3周分残存しており、その先端はやや細まり尖頭状を呈している。底部は完存しており、底面側がやや丸みを帯びている。底部周縁部は1.8cmほど折返され、その中に銅鑄製の体部を入れ込んで接合¹⁷しているが、内面をみると、底部と体部端部に約5mmほどの間隙があり、完全に

表1 経巻一覧表

	最大高 (経巻)	最大径 (経巻)	最大高 (経軸)	最大径 (経軸)	重量
軸1	20.0	2.6	21.0	4.0	15.2
軸2	20.4	2.7	—	—	19.9
軸3	20.4	3.0	—	—	22.4
軸4全体	20.0	6.9	—	—	96.1
軸4-1	20.0	2.8	—	—	—
軸4-2	19.6	2.9	—	—	—
軸4-3	19.5	3.5	—	—	—
軸4-4	20.0	3.0	—	—	—
軸5全体	19.7	4.6	—	—	28.1
軸5-1	19.7	2.1	—	—	—
軸5-2	18.7	2.4	—	4.0	—
平均	19.8	2.8	21.0	4.0	20.2
合計					181.7

※単位はcm、重量のみg

表2 経紙一覧表

No.	縦幅	横幅	行範囲	行数	行数 / 横幅
1	(8.3)	(17.1)	巻末	—	—
2	(14.9)	51.4	0394a06 ~ 0394b11	36	0.70
3	(14.5)	48.2	0393b27 ~ 0394a06	37	0.77
4	(11.1)	41.0	0393a11 ~ 0393b27	32	0.78
5	(11.3)	50.2	0392c02 ~ 0393a11	39	0.78
6	21.1	49.5	0392a21 ~ 0392c02	40	0.81
7	21.1	49.5	0391c12 ~ 0392a21	42	0.85
8	21.1	49.5	0391a29 ~ 0391c12	43	0.87
9	21.1	49.3	0390c16 ~ 0391a29	44	0.89
10	21.1	49.4	0390b01 ~ 0390c16	44	0.89
11	21.1	49.4	0389c14 ~ 0390b01	45	0.91
12	19.2	49.1	0389b26 ~ 0389c14	17	0.35
平均	20.8	48.8		38.1	
合計		536.5		419	

※単位はcm。()は、欠損のあるもの。行範囲は、大蔵経テキストデータベースにより作成。テキスト名は、法華部・華嚴部 Vol.9 佛説観普賢菩薩行法経 (0277. 雲無蜜多譯)。この他に、下段部のみのもの3点、中段部のみのもの3点あり。いずれも計測不能・位置不明。

一体化はしていない。なお、底部の折返し先端部も尖頭状を呈している。外寸は、最大高 21.6cm・口縁最大径 12.7cm・底部最大径 13.5cm、内寸は最大高 20.8cm・口縁最大径 12.5cm・底部最大径 12.5cm で、器壁厚は 1.5 ~ 2mm、重量は 1,250g である。

経筒の時期であるが、『富士の信仰遺跡』では、後述する経巻・経紙も含めて、三島ヶ岳出土とされる浅間大社所蔵資料との類似を指摘するとともに、平安時代後期と推定している¹⁸。型式学的な検討による時期や制作地の特定まで今回はその考察が及ばないが、経筒の最大高 21.6cm、経巻の最大高 20.4cm、経紙の最大縦幅 21.1cm というやや大型の法量から 12 世紀後半と考えたい¹⁹。なお、劣化が著しかったため、平成 14 年度に帝京大学山梨文化財研究所に委託し、ベンゾトリアゾールエタノール溶液及びインクララックの減圧含浸等による保存処理が行われている。

経巻 (写真 2 ~ 4・表 1) 紙本経で、紙質は維持しているが、癒着と変形が著しいだけでなく、先細りしていることから腐食も進んでいるようである。単独のもの 3 巻以外に、癒着しているものが 2 組あり、それぞれ 4 巻と 2 巻で構成される。この癒着した 4 巻と 2 巻は出土時の状態のままと考えられるが、4 巻のものは軸頭側からみると縦 2 巻、横 2 巻で癒着しているため、全体で四角形を呈している。9 巻のいずれも外装がなく、経紙が露出して経文らしきものが透けてみえるため、9 巻全てが朱書と分かる。単独ものの内の 1 巻は、直径 4mm の円柱状の棒を半割したものを軸に用いている。また、2 巻癒着したものの内の 1 巻も、やはり直径 4mm の円柱状の棒と思われるものの末端が確認できるが、同じく半割されている。これらの軸は、植物質で竹に似るが、種名については鑑定する必要がある。なお、他の 7 巻については軸を確認できず、当初からなかったのか、経紙で覆われて見えないのか、残念ながら判然としない。また、それぞれの法量は表 1 のとおりで、最大高は 18.7 ~ 20.4cm、最大径は 2.1cm ~ 3.5cm であるが、経巻の多くは変形してやや扁平化しているため、特にその影響が著しい最大径は、あくまでも参考値である。ただ、その法量から、経筒内にこの経巻 9 巻と開かれた 1 巻が納まることは確かである。

最後に注目すべき事実として、経巻の隙間に火山噴出物である直径 1 ~ 5mm のスコリアが入り込んでいることがある。これは、富士山起源のものと考えられ、経ヶ岳も火山灰で覆われているため、経ヶ岳出土を裏付ける有力な証拠の 1 つとはなるであろう。但し、富士山中でも五合目以上はどこでもスコリアに覆われているため、経ヶ岳以外の地で出土した可能性も排除はできない。

経紙 (写真 5・表 2) 開かれた 1 巻の経典名は、法華三部経の結経である「仏説観普賢菩薩行法経」と判明している²⁰。現在、この経典のうち遺存状態が良好で、継ぎ紙ごとに整理されているものは、11 枚ある。また、そ

の他に、上端部を含む上段部のみのもの 1 点 (No. 1)、下端部を含む下段部のみのもの 3 点、上下端部のない中段部のみのもの 3 点がある。この内、No. 1 については、巻末部分であり、奥書らしき文字が 1 文字半みえるが、判読は困難であった。また、他の 6 点は、残存し判読できる文字数が少ないため、11 枚のいずれと組み合わせるか特定することはできなかった。

次に、11 枚の経紙の法量及び大正新脩大藏経テキストデータベース²¹上の行数であるが、表 2 のとおりである。各継ぎ紙は、No. 12～No. 2 の順でつながり、行数の照合結果から、經典の全行が書写されていると考えられる。なお、初行までに 31cm の余白があることから巻頭部分と分かる No. 12 については、その初行に「佛説□□□□薩行法経」とあり、判読困難で判然とはしないが、「佛説観普賢菩薩行法経」と記されていると考えられ、經典の照合が確かであることが傍証される。經典の法量は、経紙が完存しているものの平均で、縦幅 20.8cm、横幅 48.8cm であるが、中心となる法量は、縦幅 21.1cm、横幅 49.5cm である。文字は縦書きで、1 枚あたりの行数は、巻頭の No. 12 が 17 行、それ以外は 32～45 行で、平均 38.1 行となる。1 行あたりの文字数は、約 17 文字で、罫線はなく、字は朱書でやや乱雑に記されている。注目されるのは、巻頭を除く No. 11～No. 2 の行数が、No. 2、3 で微増するものの漸減傾向にあることで、これは 1cm あたりの行数にするとより明瞭であり、No. 11 の最大値 0.91 行から No. 2 の最小値 0.70 行へと途中で微増することなく漸減していく。この巻頭から巻末へかけての行数の減少から、継ぎごとに一定の行数で書写するといったことを顧慮することなく、最初はやや行を詰めて書写しながらも、全体の経紙幅に余裕があることから、行数を減少させていったと考えられる。こうしたことや字体が全体を通して一定であることから、この經典については 1 名のみで書写した可能性が高い。また、No. 12 の余白が経軸への取り付け部分とすれば、No. 12 から No. 1 にむけて順に写経しつつ、経軸へ巻きこんでいき、文末の No. 1 を経巻の巻頭にしたと考えられる。

最後に、未開封の経巻の經典名であるが、他の埋納事例では、法華経 8 巻に開経「無量義経」とこの結経「仏説観普賢菩薩行法経」の 10 巻を埋納することが多いことから、昭和 10 年の新聞報道以来、残り 9 巻の經典名は不明ながらも、法華経 8 巻に開結経 2 巻で構成されていると認識されてきたようである。しかし、あくまでも推測であり、これらの經典名を解明するとともに、各經典に記されている可能性の高い奥書からその奉納人名や奉納年を特定するためにも、その開巻が望まれる。

(3) 三島ヶ岳出土資料・浅間大社所蔵資料と伝経ヶ岳出土資料の関係

伝経ヶ岳出土資料は、その出土地が確定されておらず、これまでに富士山中で発見された經典資料のうち、三島ヶ岳出土資料か浅間大社所蔵資料と同一資料である可能性があるため、ここでその比較検討を行いたい。

まず、昭和 5 年 (1930) に発見され、現在その所在が不明となっている三島ヶ岳出土資料については、経筒の器高が推定 51.5～54.5cm、底径が約 28cm と格段に大きく、開かれた經典も重複せず、経巻についてもその経軸が杉や竹を二ツ割したものである点は類似するが、その法量が直径 5.4mm、長さ 24.2cm と、直径で 1.4mm、長さで 3.2cm ほど伝経ヶ岳出土資料より大きいなど相違点が多く²²、資料が残らないことから断言はできないが、同一資料である可能性は低いと考えられる。

次に、富士山本宮浅間大社所蔵資料であるが、経巻 10 巻の内の開かれた 5 巻の経紙については、伝経ヶ岳出土資料と同じ法華経というだけでなく、『富士の信仰遺跡』も指摘するように、その法量が縦 21.5cm、継ぎ幅 48.3cm で、字は朱書きでやや乱雑である²³という点も伝経ヶ岳出土資料と類似する。ただ、この経巻 10 巻自体の来歴が不明であり、三島ヶ岳出土品であるかのみならず、富士山頂で出土したものであるかも確定はしていないため、浅間大社所蔵資料については、まずはその出土地を特定する必要がある。

このように、三島ヶ岳出土資料・浅間大社所蔵資料と伝経ヶ岳出土資料を比較検討するためには、それぞれの資料の所在や来歴の調査がまずは必要であり、今後の課題としたい。

3 経ヶ岳の歴史 (表 3)

(1) 吉田口経ヶ岳の由来

伝経ヶ岳出土資料の出土地の比定を試みるにあたって、出土地として想定される富士山中の各所に存在する

表3 富士山経ヶ岳に関する年表

No	和暦（西暦）	登山口	場所	内容（【】は原文。他は概要のみ）
1	久安5年（1149）	村山口	三島ヶ岳	富士上人と号する末代が、鳥羽法皇の援助を得て、一切経5296巻を埋納する。（『本朝世紀』久安五年四月十六日の条・『本朝文集』巻五十九「鳥羽天皇写大般若経発願文」参照）※註48 三宅1983
2	建長3年（1251）	村山口	三島ヶ岳	【未申峯ハ冠ノ嶽也、前二有リ石室、金時上人安ス種々ノ仏具等ヲ】※註51 大高2010
3	延宝8年（1680）	吉田口	不浄ヶ岳	【ふちやうかたけ】※註25
4	延宝8年（1680）	吉田口	姥ヶ岳	【うはかたけ】※註25
5	延宝8年（1680）	吉田口	不浄ヶ岳	【不浄峯】※註25
6	延宝8年（1680）	須走口	経の峯（山頂）	【観音之嶽 此所に、八つヲうちば、きやうのみね、せいしがくぼ】※註35
7	延享4年（1747）	吉田口	経ヶ岳	日蓮が妙経を書写し富士山不浄ヶ嶽に奉納した地は、今は経ヶ嶽と呼ばれている。その碑も砂に埋もれてしまったため、改めて塩屋平内左衛門が金銅宝塔を奉納する。※註24
8	宝暦14年（1764）	吉田口	上行寺・経ヶ岳	【南無妙法蓮華経 富士山 経嶽 □皆皈妙法後五百歳中廣宣流布 元祖日蓮大菩薩柴庵地上上行寺（以下略）】註59
9	安永8年（1779）	吉田口	経ヶ岳	本文【大士如クニ甲州吉田ニ一 手ヲ筆シテ經王全帙ヲ以テ瘞ミニ富嶽ノ半嶺ニ一以テ為ニ後世流布ノ之苗根ト一世ノ名クニ經嶺ト一】註【如甲州 統紀曰、久本房語ニ甲州山水之美ヲ一大士幸ニ得テ一小暇ヲ一使ム久本房ヲシテ擔シ袱ヲ一註【吉田 在ニ鶴郡、大士遊ニ化其地一百日、後建レ寺號ニ吉祥山上行寺一、大士手書本尊一幅、書一本為ニ寺珍一、大士嘗賜ニ書ヲ吉田鹽屋某ニ一以テレ故ヲ今茲ニ受成ス、其書ヲ今茲ニ藏スニ鹽屋家ニ一】※註28
10	安永9年（1780）	吉田口	経ヶ岳	【左り経か岳日蓮上人読経せし所と伝ふ 是中宮の上に当る】※註55
11	天明5年（1785）	吉田口	経ヶ岳	経ヶ岳に石室を建て、塩谷家で毎年夏中は兼帯してきたが、高祖五百遠忌以前に、この石室が風雨で破壊されてしまい、再建できずにいることや、近年になって、上行寺が経ヶ嶽上行寺と新規に名乗ったことについて、塩谷家が兼帯する経ヶ嶽への権利を侵害するものであると、本山の光長寺へ主張する。※註60
12	文化11年（1814）	吉田口	経ヶ岳・姥ヶ懐	【五合五勺 道ヨリ南ノ岩峯ヲ経ガ岳ト云フ 相伝フ昔僧日蓮此ノ地ニ於テ法華経読誦セシ地ナリトゾ 堂一宇アリ其ノ内ニ銅柱ニ題目ヲ鑄付シアリ 但シ日蓮參籠ノ地ハ少シ上ニ竈穴アリ 今姥ガフトコロト稱ス 是レ日蓮風雨ヲ凌ギシ所ナリトゾ 其ノ時塩屋平内左衛門ガ家ニ宿シ彼ガ案内ニテ登山シ此ノ処ヲ執行ノ地ト定メケルトゾ】（以下に日蓮年譜の経ヶ岳の抜粋が続く）※註5『甲斐国志』
13	文化11年（1814）	吉田口	経ヶ岳・姥ヶ懐	【五合五勺 法華経ヶ嶽 道ヨリ南ニアリ 小屋一宇其内ニ唐銅ノ宝塔有り 宗祖日蓮大菩薩安置 文永年中日蓮大菩薩此所ニテ一日行法ノ靈地也其時塩屋平内左衛門カ家ヲ宿トシテ彼者郷道トシテ此地ヲトセリト云 但端座ノ地ハ此ヨリ少シ上ニ一ノ窟穴アリ姥カフトコロト云 此幅中ニ風雨ヲ陵キシト云 此地今ニ塩谷平内左衛門進退ス】※註5『甲斐国志草稿』
14	文化11年（1814）	吉田口	経ヶ岳	日蓮が塩屋平内左衛門宅で百日読経をした後、富士山に登り、その中腹に妙経を埋めた。上行寺は元は塩屋の内庵であるが、日蓮の時にあったかは分らない。（日蓮年譜の上行寺に関する抜粋あり）※註61
15	文政6年（1823）	吉田口	経ヶ岳	【経ヶ嶽 宗祖大聖人 文永六己巳 一百日行法所也。南無妙法蓮華経 スの如く巖に彫付有り。大岩のこし路の方に日蓮聖人一百日籠り玉ふ小堂有しが、古朽してたおる。】※註62
16	天保2年（1831）	須走口	山頂	天保2年に浅間神社主小野大和が豆州君沢郡法華宗玉澤上人（日桓）の協力を得て、宝経塔を山頂に奉納。※註32
17	天保3年（1832）	須走口	須走	浅間神社主小野大和の妻、幾曾女の名で版木「題目勸進」が制作される。※註36・39
18	天保3年（1832）	須走口	須走	浅間神社主小野大和の敷地に富士山開會堂を建立し、日蓮大菩薩の大像を安置。※註34
19	天保3年（1832）	村山口	経ヶ岳（山頂）	村山浅間神社所蔵の富士山縁起の刷物。山頂の経ヶ岳への参詣と中宮女人堂の再建によるご利益を唱える。奥書に信解院日沖とある。※註43
20	天保4年（1833）	須走口	各合目と山頂	各合目の石室に神仏を安置し、日桓が開眼供養を行う。※註34
21	天保5年（1834）	村山口	経ヶ岳（山頂）	【頂上東の方に経ヶ岳といふ所あり、一切経を納し所なりと云は此末代が関東の民庶に勸進し仙洞に調進せし一切経を納し所なり】、【当南有大日堂 絶頂之表口也 此処称雷鳴岳 西有経塚塚并浅間岳 道雄云、此経塚は上にいふ末代上人一切経を納るの所、吉田口なる経岳と異也】※註53
22	天保9年（1838）	須山口	一	須山口御師土谷平太夫が発願主となって祖師像を造立。安置した場所は不明。※註45
23	天保12年（1841）	須走口	山頂	浅間神社主小野大和・同妻の喜楚女・織右衛門が発願主、江戸伝馬町講中が本願主となって、唐銅の祖師像を造立し、富士山頂へ安置する。※註42
24	嘉永元年（1848）	吉田口	五合五勺	【五合五勺 小御嶽横吹一ノ鳥居】と題する絵図中に【日蓮堂 弘化二巳年ヨリ日蓮祖師堂経ヶ岳ヨリ引テ立ル】とある。※註9 文献中
25	嘉永元年（1848）	吉田口	経ヶ岳	【経ヶ嶽 道より南の岩峯を云う、庚申の歳には女も此処迄のぼるなり 是より中道巡りみち有り】※註9 文献中
26	嘉永元年（1848）	吉田口	姥ヶ懐	【姥カ懐】とある絵図中に【文永六年妙経一部ヲ埋テ 経カ嶽】とある。※註9
27	嘉永元年（1848）	吉田口	山頂	【法華トウ】（「吉田須走拜所」絵図部分）・【日蓮】とある石室と祖師像（「頂上薬師嶽」絵図部分）※註9 文献中
28	万延元年（1860）	吉田口	経ヶ岳・姥ヶ懐	【経ヶ嶽 是ハ道より南の岩峯を云 此所ハ文永六年日蓮上人妙法蓮華経一部を手写し不二山の半腹に埋て経が嶽といふと年譜に見えたハ則是也 又この地は日蓮上人参籠の地にして草庵ありしが、弘化三年少し下の地へ移す 姥ヶ懐 これハ日蓮が風雨を避し所と云】※註63
29	万延元年（1860）	吉田口	山頂	【題目銅塔 初穂打場の少し下にあり】※註63
30	万延元年（1860）	村山口	五合目	祖師堂を建立し、祖師像を祀る。※註45
31	万延元年（1860）	村山口	五合目	【南無天拝願満日蓮大菩薩】と題する絵札。上段に【如日月光明能除諸幽冥 斯人行世間能滅衆生闇】【ひさの法乃八臺の蓮華谷 ひらけし不二の経王嶽】、下段に祖師の絵像と【日法上人御作祖師主御影 奉安置富士山表口五合目 野中村 大泉寺】とある。（その内容から万延元年発行と考えられる。）※註45
32	慶応4年（1868）	吉田口	経ヶ岳	文永6年（1269）に経ヶ嶽で百日の大作をした際に、当山へ草庵を造営した。※註64
33	明治35年（1902）	吉田口	経ヶ岳	慶応3年（1867）の火災で、塩谷家の祖師堂は焼失し、明治5年（1872）の廃仏毀釈で、経ヶ岳の宝塔は廃絶させられた。開宗650年遠忌である当年を機に、これら祖師堂と宝塔を明治38年までに再建立すること目的に、富士経ヶ岳宗祖霊蹟再興会を組織し全国から寄付を募ることを、内務省及び福地村へ願ひ出る。※註65
34	大正13年（1924）	吉田口	経ヶ岳	富士山経ヶ嶽日蓮上人の遺跡の仮宮増築工事の際、経筒・経巻を発見。※参考資料1
35	昭和4年（1929）	山頂	山頂	夏、銅仏の破片及び一石経石を発見。※註46
36	昭和5年（1930）	山頂	三島ヶ岳	8月初旬、頂上奥宮の参籠所建設用の砂礫採取のため、三島ヶ嶽の麓を削ったところ、経巻軸の入った木郭や経巻の入った経筒を発見。※註46
37	昭和6年（1931）	村山口（富士宮口）	経ヶ岳口	①五合目室主後藤又次郎が宝塔周囲の石垣を修理して日蓮生誕650年の記念塔を造ろうとした際に、地下3尺より、直径1寸長さ3寸位の水晶軸と経巻物が発見された（静岡新報他）。②五合目経ヶ嶽の日蓮上人宝塔の根元から経巻1巻とそれを包む布1枚が発見された。経巻は、法華経巻一序品第一で、版経である。経巻ならびに包布から判断して、おそらく室町時代に埋められたと考えられる。※註49
38	昭和9年（1934）	吉田口	経ヶ岳	参籠所の建築。※参考資料1
39	昭和10年（1935）	吉田口	経ヶ岳	大正13年に経ヶ嶽で発見された経筒・経巻の初報。※参考資料1
40	昭和18年（1943）	吉田口	頂上奥宮	【日蓮の場合も経巻が経ヶ岳から出たのではなく、昭和18年ころ、頂上奥宮の物置きをつくるため富士吉田や河口湖町の三人の石割屋に大石を割り、取り除かしているとき、三島ヶ岳と同じく、ぎっしり経巻がつまったものが出てきた。そのうち経筒にはいつて風化していないものを、日蓮署名の経巻と曼荼羅を三人が一巻ずつ持ち帰ったのが、吉田の塩谷平内右衛門家に一部渡り、経ヶ岳から出土したという伝承と結びついたのが事実である。】※註1
41	昭和28年（1953）	吉田口	経ヶ岳	常唱殿（八角堂）建立※註6
42	昭和42年（1967）	吉田口	経ヶ岳	けずりとられた崖面で、15枚の古銭発見。皇宋通宝・治平元宝・聖宋元宝・淳祐元宝・洪武通宝・永樂通宝が確認された。※註11

経ヶ岳の由来と歴史を辿りたい。

まず、吉田口の経ヶ岳であるが、その初見は、管見の限りではあるが、延享4年（1747）に吉田の御師である塩屋平内左衛門が経ヶ岳に宝塔を奉納する際に、本山である光長寺（現、静岡県沼津市岡宮）住職の日泰が記した供養文²⁴中である。この文書中には、日蓮が不浄ヶ岳に經典を埋納したことから、今は同地が経ヶ岳と称されていると記されており、その初見当時から、経ヶ岳は日蓮による經典埋納伝承と不可分であったことや、経ヶ岳の地が不浄ヶ岳と同一若しくはその一部と認識されていたことが分かる。この不浄ヶ岳であるが、延宝8年（1680）の富士山中を描いた八葉九尊図²⁵や月旺御身拔²⁶が初見であることから、経ヶ岳より古い地名であることは確かであり、両図中に記される位置から現在の吉田口経ヶ岳を含むその周辺地に比定される。『甲斐国志』によれば、不浄ヶ岳は現在の経ヶ岳より上にあったとされ、「古へハ六七月ノ間山伏此ノ処ニ籠リ居テ登山ノ旅人不浄解除ノ祓ヒセシ所ナリ 故ニカク称スルトゾ」²⁷とある。この場所は、現在の六合目安全指導センター東側に広がる平地の北東端部で、過去に山小屋の六合荘があった地の周辺と考えられる。また、八葉九尊図には、「ふちやうかたけ」（不浄ヶ岳）の上に「うはかたけ」とあり、現在の経ヶ岳の下にあって、日蓮が風雨を凌いだという「姥ヶ懐」周辺を指しているとするれば、経ヶ岳周辺が「うはかたけ」（姥ヶ岳）と呼称されていた可能性もあるであろう。このように、経ヶ岳という地名自体は、江戸時代中期以降のものであるが、日蓮による富士山中への埋納伝承についても、同様であると考えられる。それは、先述した延享4年（1747）の供養文以前に記録がないことや、日蓮の伝記における初見が、安永8年（1779）に成立した『本化高祖年譜 全』と『本化高祖年譜攷異』²⁸であり、それ以前の伝記では確認されないことから分かる。こうしたことから、経ヶ岳と日蓮の伝承が不可分であることが分かるが、この日蓮による經典埋納伝承は、吉田口の経ヶ岳が最も古く、その後富士山中の各所で語られるようになっていく。

なお、川口（現、山梨県富士河口湖町河口）の御師である大梅谷 本庄監物が制作した版木²⁹には、吉田口経ヶ岳に日蓮上人が訪れた際の宿坊が大梅谷であり、その縁で今は日蓮宗の宿坊及び御祈願所となっていることが記されている。また、この大梅谷は、『甲斐国志』の蓮華寺（富士河口湖町大嵐）の記述中において、「弘安五年壬午九月某日 日蓮往^{クトキ}武州池上ニ^ニ富士ノ北麓ヲ過ギ 号^ニ鎌倉海道^一 川口村上野坊ガ家ニ宿ス 浅間明神御師今其家存 隣家ニ梅屋采女ト云フ者アリ 同御師ナリ今存 日蓮ニ謁見ス 日蓮乃チ神仏一致ノ大意ヲ示シ 権実ノ道理ヲ説ク 采女拜伏シテ帰依ス」³⁰とある中の梅屋采女と同一家である可能性が高く³¹、こうした日蓮宗との深い関係が、大梅谷と経ヶ岳が結びつく背景にあったと考えられる。

これらの『甲斐国志』の記述や版木の内容から、江戸時代後期頃に、川口御師も経ヶ岳の祖師信仰に関係していたことは確かであり、今後経ヶ岳の歴史を探る上では、川口御師の活動も視野に入れていく必要がある。

(2) 吉田口以外の経ヶ岳（図3・4）

須走口 吉田口の経ヶ岳に次いで、祖師信仰に関わる形で経ヶ岳が登場するのが、須走口である。天保2年（1831）に、須走口の浅間神社神主の小野大和が、豆州君沢郡玉沢（現、静岡県三島市玉沢）の経王山妙法華寺の41世貫主日桓の協力を得つつ、日蓮上人550年遠忌に合わせて富士山頂に宝塔（宝経塔）を奉納³²するのであるが、その山頂の地名が「元経ヶ岳」とされる³³。この「元経ヶ岳」の場所であるが、『法華富士の記』³⁴には、内院（山頂火口）へ賽銭を投じ、神仏へ祈願する地である「初穂打場^{はつほうちば}」を表す鳥居手前に「法華開会塔」の標記と共に宝塔が描かれ、その左手に「元経ヶ嶽」と標記があることから、宝塔周辺地かその南にある「観音ヶ岳」（現在の伊豆ヶ岳）が「元経ヶ岳」と想定される（図3・4）。ここで「元」とあることから、その現「経ヶ岳」もあるはずであるが、その候補地としては、吉田口の経ヶ岳以外に、後述する三島ヶ岳や村山口五合目が挙げられる。また、観音ヶ岳については、延宝8年（1680）刊本の『富士山の本地』³⁵に「観音之嶽 此所に、八つヲうちば、きやうのみね、せいしがくぼ」とあり、宝塔建立以前から観音ヶ岳周辺は「きやうのみね」（経の峯）と称されていたことが分かる。このことから、詳しくは後述するが、日蓮による富士山中への經典埋納伝承に基づき、その名称から經典関連の由来を持つであろう「きやうのみね」を「元経ヶ岳」とみなし、その近くへ宝塔を建立した可能性がある。次に、この宝塔の建立地であるが、既に竹谷鞆負氏が詳述³⁶しているように、『富士山真景之図』³⁷には「吉田須走拝

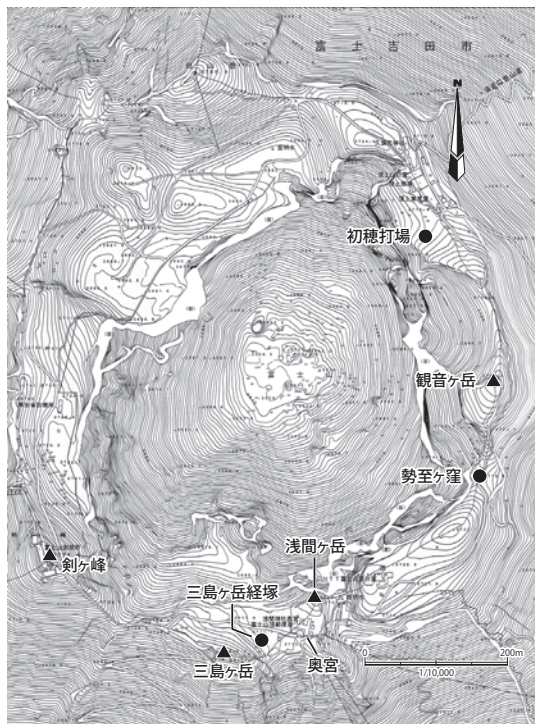


図3 富士山頂周辺図

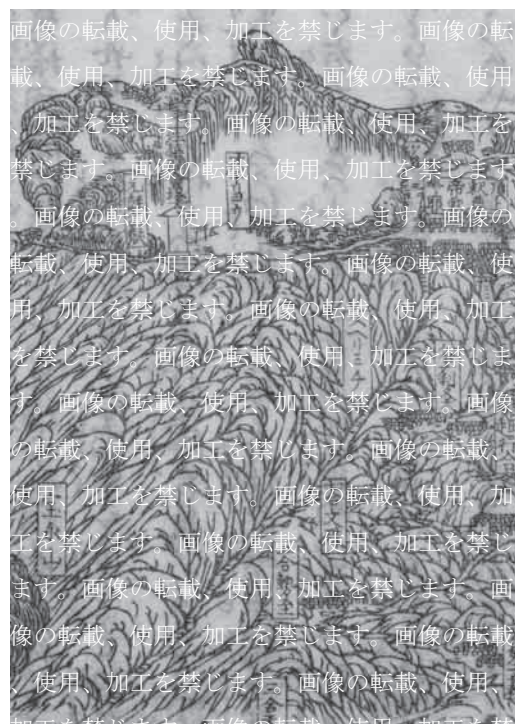


図4 「富士山頂上略図」部分拡大
(『法華富士の記』・信州大学附属図書館所蔵)

所」とある初穂打場の手前に宝塔が描かれ、『富士山明細図』³⁸や『法華富士の記』にも同様に描かれることから、初穂打場があったと推定される現在の久須志岳と大日岳の合間の平地あたりが宝塔の建立地と考えられる。

なお、この宝塔奉納以降も、天保3年(1832)には題目勧進の版木制作³⁹及び小野大和敷地内への富士山開會堂の建立と日蓮大菩薩像の安置⁴⁰、天保4年(1833)には須走口登山道の各合目への神仏の安置⁴¹、天保12年(1841)には富士山頂への祖師像奉納⁴²と立て続けに奉納がなされており、須走口に祖師信仰が根付いていく様子が分かる。

村山口 村山浅間神社で所蔵する縁起に、奥書に天保3年(1832)とある「富士山頂上経ヶ岳霊場略縁起」⁴³がある。内容は、山頂の経ヶ岳へ宝塔を建立して参詣することと、村山口の中宮女人堂を再建して祖師像を安置することによるご利益を説くものであるが、「大導師日蓮大菩薩文永六^(ママ)月此頂に登り給ひて、拾石染筆まし／＼て妙經を書写し、一岳二岳の辺りに塚となし給へるより経ヶ岳と呼なせり、五合目を経ヶ岳とおひふは誤りなり」とあり、日蓮がいわゆる一石經を書写して塚を築き、それを経ヶ岳と呼んだことや、五合目にも経ヶ岳という地があったことが分かる。また、同縁起には、村山三坊のうち大鏡坊と池西坊の旧記とされるものが引用されている。それによると、まず大鏡坊の旧記には、日蓮が大鏡坊の社殿へ正嘉2年(1257)に法華經一部を奉納したことが記され、池西坊の旧記には、同じく日蓮が文永6年(1269)に富士山頂で「全石經修行」したことが記されるとしており、この縁起が村山三坊の協力を得て制作されたであろうことを示唆している。また、このうち後者の「全石經修行」が、先の一石經書写を指すのであろう。ここで、問題となるのは、経ヶ岳の近くにあるという一岳と二岳の位置であるが、江戸時代に村山三坊の池西坊が版行した刷物「蓮嶽真形図」⁴⁴によれば、一岳は表口(村山口)登山道が山頂へ達する左手に描かれ、二岳は更に左手で「剣峰」と標記される。このことから、この「蓮嶽真形図」の認識と「富士山頂上経ヶ岳霊場略縁起」の認識が同一であればという前提ではあるが、一岳と二岳は、それぞれ現在の三島ヶ岳と剣ヶ峰に比定することができ、この両岳の近くに一石經の塚が日蓮により築かれたと説くものであると解釈できる。

最後に、縁起中で記される五合目の経ヶ岳であるが、縁起の内容が村山口を主とすることから、吉田口ではなく、村山口五合目を指しているのであろう。この村山口五合目も、大泉寺の主導で、万延元年(1860)に祖師

堂が建立され、天保9年（1838）造立の祖師像を安置⁴⁵しており、縁起版行の時点でも何かしらの信仰があった可能性もある。

(3) 経ヶ岳出土品からみる経ヶ岳成立史

富士山中で「経ヶ岳」と称される地は、先述してきたように、吉田口五合五勺以外に富士山頂の三島ヶ岳周辺と観音ヶ岳周辺及び村山口五合目があるが、その内、三島ヶ岳と村山口五合目は、吉田口経ヶ岳と同じく経典が出土している。まず、三島ヶ岳では、銅仏の破片及び一石経が昭和4年（1929）に発見⁴⁶され、数百本の経巻軸が入った木槨と50巻の経巻が入った経筒が昭和5年（1930）に発見⁴⁷されており、後者の全てかその一部は、久安5年（1149）の末代上人による埋納物であると考えられている⁴⁸。次に、村山口五合目であるが、昭和6年（1931）に、日蓮上人宝塔の根元から室町時代に埋納されたと考えられる経巻1巻とそれを包む布1枚が発見されている⁴⁹。

この両者に共通するのは、経典が出土したこと以外に、祖師信仰の対象地であることであり、これらの点は、吉田口経ヶ岳も同様である。そして、この3ヶ所の「経ヶ岳」は、いずれもその成立が、これまでみてきたように江戸時代を遡らないものであるのに対し、その出土品の全ては室町時代以前である。では、この3ヶ所に「経ヶ岳」が成立した背景であるが、江戸時代の「経ヶ岳」成立以前から、この3ヶ所で経典に係る遺物、つまり経巻か一石経が出土しており、それが広く知られていた可能性が考えられる。これは、「富士山頂上経ヶ岳霊場略縁起」に「拾石染筆まし／＼て妙経を书写」という一石経を思わせる具体的記述や、実際に三島ヶ岳で一石経が出土しているという事実からも強く示唆されるところである。つまり、「経ヶ岳」成立以前から、富士山中の特定の場所で経巻や一石経が出土することは周知の事実であり、そこへ江戸時代中期から盛んになっていく祖師信仰や身延山信仰⁵⁰が結びついたことで、経典出土地は日蓮により経典が埋納された地であるとの認識になり、祖師信仰に基づく「経ヶ岳」の成立につながったと考えられるのではないだろうか。このことは、先述したように、祖師信仰が富士山中で盛行する以前である延宝8年（1680）刊本の『富士山の本地』において、「きやうのみね」（経の峯）とみえ、当時から経典や経石の埋納伝承があったことが推定されることや、後になって、その近くへ須走口側から祖師信仰に基づく宝塔が奉納され、「元経ヶ岳」とも称されていたことから、裏付けられることである。いずれにしても、伝経ヶ岳出土資料も含め、富士山中から出土した経典資料の制作年代と、祖師信仰に基づく「経ヶ岳」成立年代は、約600年の年代差があるとともに、その間の経緯に未だ不明な点も多い。今後、その歴史の空白を埋めていくためにも、経典資料の分析とともに、経ヶ岳に関する歴史資料の調査を進めていく必要がある。

4 まとめ

(1) 富士信仰地としての経ヶ岳

富士山各所の経ヶ岳の歴史を紐解いてきたが、経典が出土した3ヶ所の経ヶ岳は、富士信仰の歴史上においても重要視されてきた場所であり、経典を埋納するに相応しい地といえる。

まず、三島ヶ岳については、末代上人による埋納が行われたとされるだけでなく、建長3年（1251）の奥書のある「浅間大菩薩縁起」⁵¹において、やはり三島ヶ岳に比定される「未申峯」に、末代上人の3代前に登拝したとされる金時上人により仏具が納められとされる。また、その後も寛薩上人、日代上人、そして末代上人により、「未申峯」と断定はできないが、経典や仏具が奉納されたとしている。このように奉納の舞台として描かれている富士山頂は、古来から神仏の住まう霊地として重視され、中世から近世にかけて仏像など多くの奉納物が納められた地であり、「浅間大菩薩縁起」に描かれる様子は、その一端を指し示しているといえる。また、信仰地として極めて重要な地であるという点は、同じく富士山頂に位置する「きやうのみね」も同様であり、今後、経典や一石経が発見される可能性はあるであろう。

次に、吉田口経ヶ岳と村山口経ヶ岳であるが、植生変化により景観が一変する境界地であり、かつ富士山中腹を一周する巡拝路（御中道）の合流地であるという点で、両者は共通する。吉田口については、『甲斐国志』⁵²に、経ヶ岳より下の騮ヶ馬場から中宮までは「古木天ヲ蔽ヒ蘿藤道ヲサヘギリテ攀ヂガタキ所多シ」とあり、中宮よ

り上は「砂石山ヲナシ草木不_レ生_セ因リテ毛ナシト称ス 岐路益々ハゲシ四方ヲ眺望スレバ名ヲ得シ高山皆目下ニ見ユ 又此所ニ遥拝所アリ 是レ最頂ニ攀ザルコト不_レ能者ノ拜スル所ナリ」とあり、五合目とされる中宮が森林限界で、それより上では草木がなくなり、眺望が一変する様子がよく分かる。経ヶ岳は、こうして森林帯を抜けた五合五勺にあたるわけであるが、更に少し上は、先述したように不浄ヶ岳という地であり、御中道の起点ともなっている。

このように植生の変遷に伴う明瞭な景観変化がある富士山は、近世においては吉田口以外の登山道も、麓から山頂に向かって茅野・木立・毛ナシ⁵³や草野三里・木山三里・岩山（すな山）三里八町⁵⁴という3区分がなされ、茅野と木立の境と木立と毛ナシの境が信仰上の区分としても重視されてきた歴史がある。特に、経ヶ岳周辺も含む木立と毛ナシの境は、「天地の境」⁵⁵とも称され、村山口や須走口においては一合目の起点であると同時に、ここから上が本山⁵⁶であり、少し上の五合目は、繰り返しになるが吉田口と同じく御中道の合流点でもあった。このように、吉田口だけでなく、村山口においても五合目は重要な地であり、富士山中において山頂と同じく経典の埋納が行われるに相応しい地といえ、後に両者とも「経ヶ岳」と命名されたことも、全く不思議なことではない。ちなみに、吉田口では、茅野と木立の境である一合目においても、江戸時代と考えられる一石経の経塚が発掘⁵⁷されており、景観上の境界が信仰上重視されてきたことを裏付けている。更に、この一石経からは、法華経28品のうち、第6品の「授記品」と第14品の「安樂行品」が確認されており、経碑が未発見のため、その埋納の背景が不明ではあるが、「経ヶ岳」と同じく日蓮宗寺院や信徒が関連している可能性はあるであろう⁵⁸。

(2) 伝経ヶ岳出土資料の出土地

これまで検討してきた経ヶ岳を称する地は、吉田口五合五勺、村山口五合目、三島ヶ岳、観音ヶ岳の4ヶ所、経典か一石経が出土したとされる地は、このうちの吉田口五合五勺、村山口五合目、三島ヶ岳に吉田口一合目を加えた4ヶ所である。そして、伝経ヶ岳出土資料の出土地は、これらのうち、伝来地である吉田口五合五勺か、同時期の経筒・経典が出土している三島ヶ岳の2ヶ所の可能性が高いが、第2表No.40で指摘されるように、それ以外の地である可能性も否定はできない。残念ながら、本稿でこれ以上推定地を絞り込むことは、先述したきたように、手元の資料のみでは困難であり、富士山中から出土した経筒・経巻資料及び各経ヶ岳の歴史調査を今後も継続して行い、解決の糸口を探りたい。

以上、事実確認に終始してしまっただが、伝経ヶ岳出土資料の研究に際しての基礎資料として今回の報告が役立つことができれば幸いである。なお、本稿の執筆にあたり、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。伊藤昌光・井上輝夫・遠藤是秀・小林義生・大高康正・奥脇和男・梶山沙織・菊池邦彦・櫛原功一・坂詰秀一・高橋晶子・布施光敏・松田香代子・渡井一信（敬称略、五十音順）

¹ 小川孝徳「富士登山今昔 上」『山梨時事新聞』昭和42年（1967）7月23日・羽田光1975「富士登山史」『富士の信仰と富士講』

² 布施光敏2002『富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録 富士の信仰遺跡』

³ 前掲註1

⁴ 「幅の意は、①そばだつ。山がそそりたつ。山が高くぬきんでる。②ぬきんでるさま。独立のさま。起こるさま。（『角川 大字源』より）

⁵ 「巻之35 山川部第16ノ上 都留郡郡内領 富士山」『甲斐国志』（『大日本地誌大系 甲斐国志』第2巻 所収）。なお、『甲斐国志草稿』（田辺家文書）では、「岩幅」とはなく、名称も「法華経ヶ嶽」とある。

⁶ 久野俊彦1989「信仰 5 富士信仰と御師 （3）御師と講社 経ヶ岳」『市史民俗調査報告書第9集 上吉田の民俗』

⁷ 星野芳三1999「第2章 明治中後期の地域社会 第7節 生活と文化 2 富士登山の振興」『富士吉田市史』通史編第3巻 近・現代

⁸ 小澤準人源寛信『富士山明細図』（奥脇和男1997『富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録 富士山明細図』所収）の「27 小御岳一之鳥居入口」・「33 経ヶ岳 日蓮上人百日程場」。なお、『富士山明細図』の制作年代は、本文献によれば天保11年（1840）～弘化3年（1846）の間とされる。

⁹ 長島泰行1848『富士山真景之図』（岡田博校訂1985「江戸時代参詣絵巻 富士山真景之図」所収）の「文永六年妙経一部ヲ埋テ 経ヶ嶽」と題する絵図

¹⁰ 前掲註7によると、大正4、5年（1915、16）の「福地村富士登山道県費補助書類」に、馬返り経ヶ岳まで幅員一間とし、直登部分は迂回して乗馬・駄馬の通行を可能とするとあり、この整備による可能性がある。

¹¹ 遠藤秀男1975「富士に埋もれる古銭」『富士山の謎』大陸書房

¹² 前掲註5

¹³ 前掲註5

¹⁴ 前掲註8の「33 経ヶ岳 日蓮上人百日程場」

¹⁵ 前掲註9

¹⁶ 前掲註9文献中

¹⁷ 前掲註2によると銀蠟付け

¹⁸ 前掲註2

- ¹⁹ 石田茂作 1926 - 28「経塚」『考古学講座 古墳・和鏡・経塚・梵鐘』3 雄山閣 の経筒・経紙の法量に関する論考及び、関秀夫 1985『経塚遺文』東京堂出版・関秀夫 1988『経塚－関東とその周辺』大塚工巧芸社・奈良国立博物館編 1977『経塚遺宝』東京美術 に言己載される経筒・経紙の法量を参照した。
- ²⁰ 前掲註 2
- ²¹ 大蔵経テキストデータベース研究会 (<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)
- ²² 後掲註 46・47・48
- ²³ 前掲註 2
- ²⁴ 「経ヶ嶽に金銅之宝塔鑄納につき開眼供養文」(富士吉田市史編さん委員会 1997『富士吉田市史』史料編第 5 巻 近世Ⅲ No.75 所収) なお、同年に日勝上人へ授与され、今は上吉田の日蓮宗寺院上行寺に伝わる奈良時代制作とされる銅造如来形立像(県指定文化財)は、「黄金佛経ヶ嶽」と墨書された厨子に納められ、経ヶ岳に安置されていたと考えられる。
- ²⁵ 富士吉田市歴史民俗博物館 1993「八葉九尊図」『描かれた富士の信仰世界』
- ²⁶ 「月旺御身拔」(富士吉田市史編さん委員会 1997『富士吉田市史』史料編第 5 巻 近世Ⅲ No.33 所収)
- ²⁷ 前掲註 5
- ²⁸ 英園日英校訂 1847 浅井要麟校訂 1974「本化高祖年譜攷異会本」『日蓮上人伝記集』(健立日諦・玄得日耆 1779『本化高祖年譜 全』と『本化高祖年譜攷異』の合本。この原本は未確認)
- ²⁹ 富士吉田市歴史民俗博物館所蔵・原文「富士山之儀者三国第一之靈山^二付 往古より諸宗之祖師信仰厚く 夫々開山塔被立置 別^而日蓮上人之儀者当山へ百日乃大行を被為成 一宗開山之祖師^与願成就なましめ玉ひ今におみて富士山経ヶ嶽と唱大岩有之 自然にして南無妙法蓮華経相頭れ右場^処三祖師堂相立宗旨之休足所となりぬ 年々登山中繁榮罷有^二衣^而家其節日蓮上人之宿坊^二有之 先祖当山江上人御行之導師相勤 依之御宗旨之宿坊^二有之 右由緒^ニ御宗旨繁榮子孫長久諸^災消除之御祓差出し申候 已上 富士山御祈願所本宮御師 日蓮上人登山之宿坊 大梅谷 本庄監物 戊八月」(菊池邦彦氏に翻刻いただいた。)
- ³⁰ 「巻之 90 仏寺部第 17 ノ下 都留郡郡内領 持名山蓮華寺」『甲斐国志』(『大日本地誌大系 甲斐国志』第 3 巻 所収)
- ³¹ 菊池邦彦氏に、大梅谷の宝永 3 年(1706)の文書に梅谷采女の名があるとご教授いただいた。
- ³² 青柳周一 2000「フィクションの後始末－天保 2 年駿州駿東郡須走村神主宝経塔建立一件－」『富士信仰研究』創刊号
- ³³ 青柳周一 2006「人の移動と地域社会－富士山の「日蓮宗の名所」化をめぐる－」『近世地城史フォーラム 2 地域史の視点』吉川弘文館
- ³⁴ 『法華富士の記』(信州大学附属図書館近世日本山岳関係データベース所収)序文末に【干時天保九年 富士山東麓須走口 大歳戊戌中夏 開會堂別当謹誌之】とある。
- ³⁵ 『富士山の本地』(横山重・松本隆信編 1978『室町時代物語大成』第 11 所収)
- ³⁶ 竹谷鞆負 2011「天保 2 年の女人富士登山」『富士山と女人禁制』
- ³⁷ 前掲註 9 文献の「其二 吉田須走拜所」
- ³⁸ 前掲註 8 文献の「45 同(頂上)」
- ³⁹ 東口本宮富士浅間神社編 2008「天保 3 年小野幾曾女題目勧進」『収蔵版木展－版木にみる富士信仰の諸相』・前掲註 36
- ⁴⁰ 前掲註 34
- ⁴¹ 前掲註 34
- ⁴² 望月真澄 2008「車返霊場関係資料」『身延論叢』13・望月真澄 2010「江戸庶民の身延山巡拝－法華信仰の形態を探る－」『近世民衆宗教と旅』法蔵館・望月真澄 2011「第 1 章 甲斐国の身延山信仰」『身延山信仰の形成と伝播』岩田書院・前掲註 9 文献の「頂上薬師嶽」と題する絵図中において、「日蓮」と標記された石室内に祖師像が描かれており、この時に奉納された祖師像と考えられる。
- ⁴³ 大高康正 2010「富士山頂上経ヶ岳霊場略縁起」『富士山縁起の世界－赫夜姫・愛鷹・犬飼－』
- ⁴⁴ 堀内真 2000「蓮嶽真形図」『富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録 富士山登山案内図』
- ⁴⁵ 富士宮市教育委員会伊藤昌光氏、大泉寺住職遠藤是秀氏にご教授いただいた。
- ⁴⁶ 佐野武勇 1930「富士山頂上三島ヶ嶽の経塚」『考古学雑誌』第 20 巻 10 号
- ⁴⁷ 前掲註 46・足立鍬太郎 1930「富士山頂三島嶽南経塚遺物中の経筒と経巻とにつきて」『考古学雑誌』12 - 20
- ⁴⁸ 三宅敏之 1983「富士上人末代の埋経」『経塚論攷』(原典是三宅敏之 1961「富士山における一切経埋納供養について」『歴史考古』5)・勝又直人 2011「三島ヶ嶽経塚小考－富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から－」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』17
- ⁴⁹ 三宅敏之 1980「富士曼荼羅と經典埋納」『山岳宗教史研究叢書 14 修験道の美術・芸能・文学』(1)名著出版・和田嘉夫 2009「日蓮の遺跡」『昔の富士登山』
- ⁵⁰ 中尾堯 1999「日蓮信仰の系譜と儀礼」吉川弘文館・望月真澄 2011『身延山信仰の形成と伝播』岩田書院
- ⁵¹ 大高康正 2010「『古文状』所収「浅間大菩薩縁起」部分(尊経閣文庫、西岡芳文氏翻刻)」『富士山縁起の世界－赫夜姫・愛鷹・犬飼－』西岡芳文 2004「新出『浅間大菩薩縁起』にみる初期富士修験の様相」『史学』73 - 1
- ⁵² 前掲註 5
- ⁵³ 新庄道雄 1834「巻二十三 富士山 上」『新駿河国新風土記』(足立鍬太郎修訂 1975『修訂 新駿河国風土記』下巻 所収)
- ⁵⁴ 1823「三の山巡」(国立国会図書館山書を読む会翻刻 1979『江戸期山書翻刻叢書 1 三の山巡』所収)
- ⁵⁵ 高山彦九郎 1780「富士山紀行」(高山彦九郎先生遺徳顕彰会編 1943『高山彦九郎全集』第 1 巻 所収)
- ⁵⁶ 前掲註 53・秋山玉山 1755「富嶽記」(長野県上伊那郡教育会編『路原拾葉』8 所収)
- ⁵⁷ 布施光敏 2001『富士山吉田口登山道関連遺跡Ⅰ 歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書』・布施光敏 2003『富士山吉田口登山道関連遺跡Ⅱ 歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書』
- ⁵⁸ 田代孝 2001『民間信仰遺跡分布調査報告書－近世の経塚』においても、日蓮宗と一石経埋納の密接な関係が指摘されている。
- ⁵⁹ 富士吉田市史編さん室 1991『富士吉田市史資料叢書 11 上吉田の石造物』
- ⁶⁰ 「上行寺之儀新規に経ヶ嶽を名乗候差障につき願書」(富士吉田市史編さん委員会 1997『富士吉田市史』史料編第 5 巻近世Ⅲ No.76 所収)
- ⁶¹ 「巻之 90 仏寺部第 17 ノ下 都留郡郡内領 吉祥山上行寺」『甲斐国志』(『大日本地誌大系 甲斐国志』第 3 巻 所収)
- ⁶² 芙蓉亭蟻乗 1823「富士日記」(国立国会図書館山書を読む会翻刻 1983『江戸期山書翻刻叢書 6 富士日記・木曾採葉記』所収)
- ⁶³ 「富士山道知留辺」(富士吉田市史編さん室 1997『富士吉田市史』史料編第 5 巻 近世Ⅲ No.30 所収)
- ⁶⁴ 「都留郡上吉田村 明細帳 日蓮宗吉祥山 上行寺」(『甲斐国 社記・寺記』第 4 巻 寺院編 3 所収)
- ⁶⁵ 「富士経ヶ岳宗祖霊蹟再興の義につき願書」(富士吉田市史編さん委員会 1993『富士吉田市史』史料編第 6 巻 近・現代Ⅰ No.187 所収)